

顧客とともに考え供養を形に

立花仏壇店(宇和島市)の立花孝文社長(48)は三十歳にして立った。高校卒業後、トラック運転手や真珠養殖手伝いなど十年余り回り道した後、家業の仏壇店を継いでからは、それまでの遅れを取り戻すように右肩上がり



立花仏壇店(宇和島市) 立花孝文社長(48)

の成長を続けている。宇和島市内にある三店舗のレイアウトが人目を引く。愛宕町の本店には若いときに乗っていたナナハンを飾っている。ピカピカに磨き上げた大型バイクと唐木仏壇が妙にマッチしている。中沢町の国道56号沿い

立花仏壇店 1910(明治43)年創業。91年有限会社設立、資本金500万円。本社は宇和島市愛宕町。仏壇製造販売、墓石販売、墓地管理運営。従業員14人。2005年10月期売上高約3億円。

の店も斬新だ。ギャラリ―併設。「趣味で美術をしている人には無料で開放している」。奥の展示場には現代的なデザインの仏壇が並ぶ。色も豊富だ。屋外には西洋風の墓

「お客と一緒にブランド名が現代的なのが理解できた。「手を合せていると親の分まで長生きしようと思うでしょう。前向きに生きるためのビタミン剤であり、活力源」

養はお金の多寡ではない」「仏壇でも墓選んでも、お客は死者を思っている悩む。色は、形はどうしよう。そのプロセスが供養だと言った。たとえ三万円の仏壇でも立派な供養になると言う。お客と一緒に考えて形にする。ことに取り組んでい

回り道10年 家業継ぐ

店舗拡大、墓地分譲も

石を配置している。

墓石販売は、後継者である長男の意見を入れ三年前から始めた。「夢S O(むそ)」が墓石ブランド名だ。「夢窓国師を連想してもらってもいいし、夢想ととってもらうのもよし。いろいろな「むそ」があります」「仏壇も墓石も命の尊さを感じることで、生きる喜びを与えてくれる幸せの象徴」と言い切る。店の構えが明るく、



「お客と一緒にブランド名が現代的なのが理解できた。「手を合せていると親の分まで長生きしようと思うでしょう。前向きに生きるためのビタミン剤であり、活力源」

「三十歳になって、何をしようかと考えたときに家業があった」
菩提寺に日参して仏壇、仏具のことを一から勉強した。三年目くらいからは経営も順風満帆。十年前に本店改築、五年前に本町追手店、三年前に中沢店を出店した。
昨年は宇和島では初の宗教、宗派を問わない墓地霊園を寺院が造成するのに協力した。面積約一・三畝で最終的には六区画を分譲する計画だ。
墓石を取り扱い始めて墓地に困っているケースをよく耳にしていた。車の中でお年寄りが手を合せているのを見かけたことがある。事情を聞いてみると、足がわるいので傾斜地にある墓まで家族と一緒にいけないのだという。「ちょうど墓地の話が持ち上がった。協力を決めるきっかけになった」
今年に入っても八日に宇和島以外で初めて南宇和郡愛南町に支店をオープンさせたばかりだ。供養という使命を果たすために規模拡大はまだ続きそう。

「供養のお手伝いが私の使命」と語る立花孝文社長